

特色ある学校を創造するカリキュラム・マネジメントに関する研究
～「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修を通して～

目 次

I	研究の概要		
1	研究主題	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 1
2	主題設定の理由	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 1
3	研究目標	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 2
4	研究仮説	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 2
5	研究計画	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 2
6	研究の全体構想	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 3
II	研究の実際		
1	研究の基本的な考え方		
	(1) 特色ある学校の創造	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 4
	(2) 本研究のカリキュラム・マネジメントにおける位置付け	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 4
	(3) 本研究の「P計画」の中での位置付け	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 5
	(4) 本研究で目指す教師の姿	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 5
2	研究内容 I		
	(1) 「教育課程サポートブック」作成のための事前調査及び本調査の実施	・・・・	1－ 6
	(2) 「教育課程サポートブック」の作成	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－ 7
3	研究内容 II		
	(1) 「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修の工夫	・・・・	1－ 8
	ア 検証研修会①の実際	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－10
	イ 検証研修会②の実際	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－14
	(2) 「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修を取り 入れた教育課程の編成モデルの作成	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－19
III	研究の成果と課題		
1	成果	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－20
2	課題	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－20
	《参考文献・参考資料》	・・・・・・・・・・・・・・・・	1－20

研究実践学校 宮崎市立佐土原小学校
研 究 員 松 蘭 博 史

I 研究の概要

1 研究主題

特色ある学校を創造するカリキュラム・マネジメントに関する研究
～「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修を通して～

2 主題設定の理由

今日の我が国では、国際化、情報化、少子高齢化、価値観の多様化など、時代が急速に変化している。このように変化が著しい時代に対応する教育として、平成18年12月に教育基本法が約60年ぶりに改正され、これからの教育の新しい理念が定められた。そして、その教育理念を踏まえた形で、学校教育法や学校教育法施行規則の一部が改正され、学習指導要領も改訂された。

今回の学習指導要領には、従来の各学校に創意工夫を促す方針を引き継ぎ、更に各学校が、特色ある教育活動の展開をより一層進めることができるように示されている。学習指導要領改訂の基本方針を打ち出した教育課程審議会答申では、ねらいの一つに特色ある教育課程の編成を掲げ、「教育課程の基準の改善の関連事項」の学校運営において、「これからの学校教育においては、各学校において創意工夫を生かした特色ある教育課程を編成・実施し、特色ある学校づくりを進めていくことが特に求められる」と述べている。

宮崎県教育委員会では、平成23年7月より、第二次宮崎県教育振興基本計画「未来を切り拓く心豊かでたくましい 宮崎の人づくり」を推進している。県民一人一人が「絆」を大切にしながら、夢や目標をもって、未来を切り拓いていく教育を、本県の共通の教育理念として、県内すべての学校で展開していかななくてはならない。各学校においては、このような国や県の動向を踏まえた、特色ある学校づくりが求められている。

2003年の中央教育審議会答申には、「校長や教員等が学習指導要領や教育課程についての理解を深め、教育課程の開発や経営（カリキュラム・マネジメント）に関する能力を養うことが極めて重要である。」と述べられている。

5月に、教育課程に関する事前調査を教務主任に行った結果、「宮崎県内の小・中学校の教育課程の編成状況を知り得る資料があれば、自校の教育課程を編成する際に役に立つ」という項目に対して肯定的な回答が93%に上った。宮崎県内の小・中学校の教育課程の編成状況を知ることが、自校の教育課程の編成状況を客観的に把握できたり、他校の工夫された取組を自校の教育課程の編成に参考にしたりすることで、各学校のより特色ある教育課程の編成に役立つものとする。また、学習指導要領解説総則編には、「教育は、その本質からして（中略）各学校において教育活動を効果的に展開するためには、学校や教師の創意工夫に負うところが大きい」とある。特色ある学校づくりの基本となる教育課程を編成するために学校長が主催する職員会議等も、全教師の意見が反映され、共につくり上げていく意識のもてるワークショップ型研修を取り入れた工夫が大切であるとする。

そこで、本研究では、宮崎県内の小・中学校における教育課程の編成状況を、調査・集約した資料「教育課程サポートブック」を作成し、ワークショップ型研修で活用することにより、カリキュラム・マネジメントを促進し、各学校が、より特色ある教育課程を編成する方法はどうかあればよいかを研究していくために、本主題を設定した。

3 研究目標

宮崎県内の小・中学校における教育課程の編成状況を、調査・集約した資料「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修及び教育課程の編成の在り方を究明する。

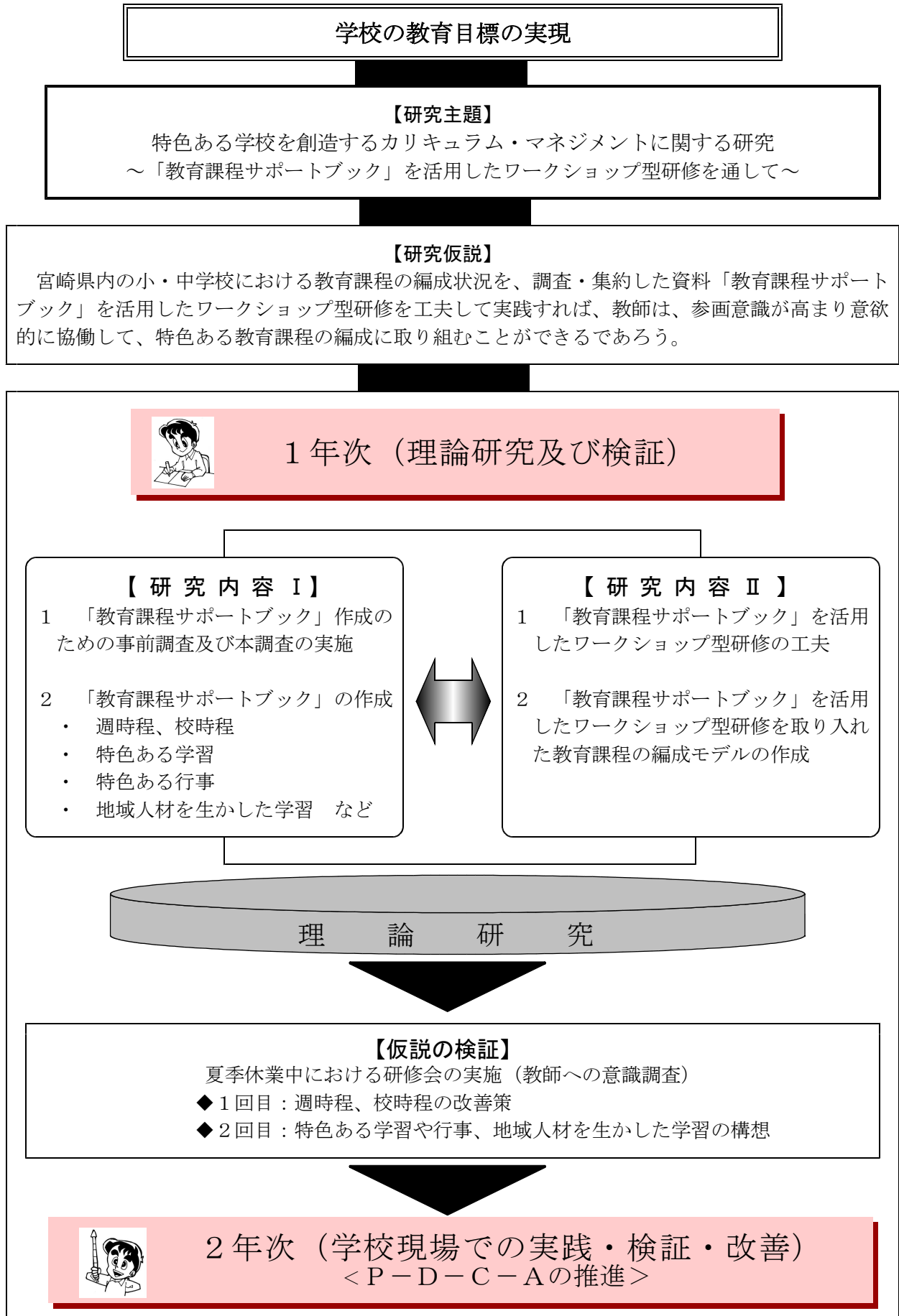
4 研究仮説

宮崎県内の小・中学校における教育課程の編成状況を、調査・集約した資料「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修を工夫して実践すれば、教師は、参画意識が高まり意欲的に協働して、特色ある教育課程の編成に取り組むことができるであろう。

5 研究計画

月	研究内容	備考
4	○ 研究の構想 ○ 先行研究調査 ○ 研究主題の設定	
5	○ 教育課程事前調査の実施（小・中・一貫校 計32校対象） ○ 課長ヒアリング（主題、主題設定の理由、研究仮説）	
6	○ カリキュラム・マネジメントの理論研究 ○ ワークショップ型研修の理論研究	
7	○ 教育課程本調査の実施（県内すべての小・中・一貫校） ○ 「教育課程サポートブック（小学校編）」の作成	・ 1-7参照 ・ 小学校編作成開始
8	○ 検証研修会の実施・事後研究（8月8日、8月26日） ○ 「教育課程サポートブック（小学校編）」の作成 ○ 主題研究中間発表（研究内容、検証研修会）	・ 佐土原小学校
9	○ 中間発表を受けて理論修正・再構築 ○ 「教育課程サポートブック（小学校編）」の作成	
10	○ 「教育課程サポートブック（小学校編、中学校編）」の作成 ○ 研究状況説明会の準備	・ 中学校編作成開始
11	○ 研究状況説明会 ○ 研究状況説明会を受けての研究のまとめ ○ 「教育課程サポートブック（中学校編）」の作成	
12	○ 「教育課程サポートブック（小学校編）」の改善 ○ 「教育課程サポートブック（中学校編）」の作成	・ 小学校編完成
1	○ 「教育課程サポートブック（中学校編）」の改善 ○ 研究報告書作成	・ 中学校編完成
2	○ 研究報告書作成 ○ 研究発表会準備	
3	○ 研究発表会 ○ 研究報告書製本	

6 研究の全体構想



II 研究の実際

1 研究の基本的な考え方

(1) 特色ある学校の創造

今回の学習指導要領には、従来の各学校に創意工夫を促す方針を引き継ぎ、更に各学校が、特色ある教育活動の展開を進めることができることが示されている。

特色ある学校を創造するとは、特色ある教育課程を編成することであるととらえることができる。辻村哲夫氏（元文部科学省初等中等教育局長）は、学習指導要領での各学校の創意工夫を生かした「特色ある教育活動、特色ある学校づくり」について、次のように述べている。

「各学校の『特色』は、各学校それぞれの教育課題克服に向けた取組が、その方法や学校の実態の違いから結果としてそのように表れてくるのであって、何か違いをつくろうと意図してつくられるものでない」

すなわち、「特色」とは、学校の教育目標の実現を目指す日々の教育実践の積み重ねのことであり、他校にない独自の取組を行い、周囲の学校が驚くような奇異な実践をするようなものではないということである。大切なことは、児童生徒や学校、また地域の実態を十分に把握し、教育課題の克服に向けて、教育活動を計画し実施していくことであるとする。

よって本研究では、特色ある学校を創造するとは、

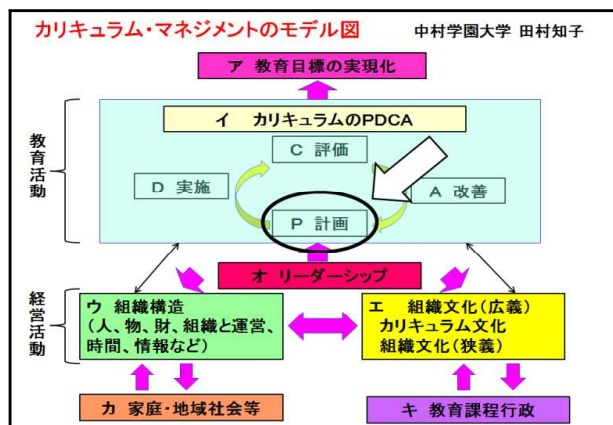
各学校の教育活動の	『よさ』は、「継続・発展」させていく。 『課題』は、「工夫・改善」を加えていく。
-----------	---

ととらえ、研究を進めていくことにした。

(2) 本研究のカリキュラム・マネジメントにおける位置付け

田村知子氏は、カリキュラム・マネジメントを、「学校の教育目標の実現に向けて、児童生徒や学校の実態を踏まえ、教育課程を編成・実施・評価し、改善を図る一連のサイクルを計画的・組織的に推進していくことであり、また、そのための条件づくり、整備である。」と述べている。

学校の教育目標は、児童生徒をよりよく成長させるために設定される。そこで、「この授業や行事、活動は、児童生徒のよりよ



い成長を促すことができるか」という視点から、常にカリキュラムを見直し、改善し続ける必要がある。【資料1】は、同氏のカリキュラム・マネジメントのモデル図である。

本研究において、仮説を検証する研修会は、「P計画」の部分に当たる。「P計画」の工夫及び充実を図ることにより、特色ある教育課程の編成ができ、教師のカリキュラム・マネジメントへの参画意識が高まり、その後の、「D実施」「C評価」「A改善」の質が、相乗効果で高まると考える。その結果、カリキュラムのPDCAサイクルが促進され、ひいては、教育目標の実現が図られると考える。

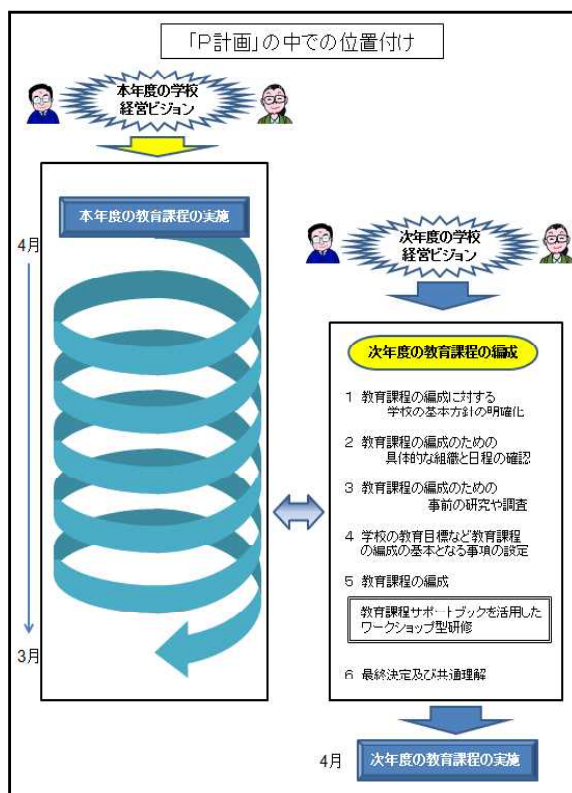
そこで、本研究では、「P計画」において、「教育課程サポートブック」をワークショップ型研修の中で効果的に活用することにより、計画段階の工夫及び充実を図っていくことにした。

(3) 本研究の「P計画」の中での位置付け

本研究は、研究実践校において、本年度の教育課程が実施されている中で、次年度の教育活動について考えるワークショップ型研修の検証を行っていく。

「P計画」の中での位置付けとしては、【資料2】にあるように、学校長の次年度の学校経営ビジョンを基に次年度の教育課程の編成を行う中の、「5 教育課程の編成」の部分に当たる。この教育課程の編成では、指導内容の選択及び組織の構想、授業時数の配当、全体計画や指導計画の整備など、協議する事項が多くある。

本研究では、その中の2つの事項（検証研修会の実際1-10から1-18で詳述）について、夏季休業中に検証研修会を行い、「教育課程サポートブック」とワークショップ型研修の有効性について検証することにした。



【資料2 本研究の位置付け】

(4) 本研究で目指す教師の姿

研究仮説にある、「教師は、参画意識が高まり意欲的に協働して、特色ある教育課程の編成に取り組む」とは、次の【資料3】のような教師の姿ととらえている。

【「参画意識が高まり」とは】（主に自分自身に関すること）

- 研修会に意欲的に参加しようとする。
- 「教育課程サポートブック」を参考にし、次年度の教育課程について、自校の実態に合うように考えようとする。
- 自分の考えを積極的に伝えようとする。
- 学校の教育目標の実現に向け、自分の担当している授業や校務分掌などの職務に、積極的に取り組もうとする。

【「意欲的に協働して」とは】（主に他の教師とのかかわりに関すること）

- 他の教師の話を、傾聴しようとする。
- 他の教師の話を受けて、前向きに意見を出そうとする。
- 学校の教育目標の実現に向け、共に取り組んでいこうとする意識をもつ。



【資料3 目指す教師の具体的な姿】

2 研究内容 I

(1) 「教育課程サポートブック」作成のための事前調査及び本調査の実施

県内の各小・中学校は、一般的に、学期末に行われる職員会議での教育課程の反省や、学校評価などを基に教育課程を編成していく。その際、それぞれの市町村の教務主任会や、県の教務主任会などで得られた情報も参考にすることが多い。

5月に、宮崎市内を中心とした小・中学校及び小中一貫校を対象に、約30校の教務主任に教育課程に関する事前調査を行い、「どのような資料や情報があると、よりよい教育課程の編成に役立つか」を調査した。【資料4】は、事前調査の一部である。

番号	知りたい資料や情報	割合
①	異校種の学校経営案	10.3%
②	近隣の学校の学校経営案	51.7%
③	宮崎県内の小・中学校の教育課程の編成状況	93.1%
④	カリキュラム・マネジメントの研修方法	62.1%
⑤	【その他】 ・ 教育の動向 ・ 地域の方々が自校に期待していること ・ 宮崎市や宮崎県の方針や事業 ・ 行事等の時間設定の工夫 など	

【資料4 教育課程に関する事前調査の一部】

この結果を見ると、③の「宮崎県内の小・中学校の教育課程の編成状況」が最も多かった。これまでに、宮崎県内の小・中学校すべての教育課程の編成状況がまとめられた資料はない。このような資料を作成しまとめることで、各学校の教育課程の編成の一助となり、ひいては、宮崎県の教育の向上に寄与できるものとする。

宮崎県内の小・中学校の教育課程の編成状況を調査・集約した資料「教育課程サポートブック」を作成することで、次のような利点が考えられる。

- 宮崎県内の小・中学校の教育課程の編成状況を知ることができる。
- 自校の教育課程の編成状況を、客観的に把握することができる。
- 他校の取組の様子や工夫を知り、自校の教育課程の編成に役立てることができる。

同事前調査で、宮崎県内の小・中学校の教育課程の編成状況で知りたいものを調査した。以下、「とても知りたい」「知りたい」の合計が70%を超える項目を洗い出した。

- ① 週時程、校時程の工夫、その学校独自の特色ある学習、カリキュラム・マネジメントの研修の有無 (93.1%)
- ② 学校経営ビジョン達成のための、教師や児童、保護者に向けた、分かりやすいグラウンドデザインの有無 (86.2%)
- ③ 小学校・中学校との連携の仕方や回数 (85.7%)
- ④ 地域人材を生かした学習 (82.8%) ⑤ 学校の特色ある行事 (79.3%)

①の中の週時程、校時程の工夫については、各学校の学校経営案で調査した。

学校経営案で直接調査することができなかった項目については、宮崎県内の全小学校、中学校に本調査を依頼した。【資料5】は、本調査の概要及び調査資料の一部である。

<p><本調査の概要></p> <p><input type="checkbox"/> 調査期間 平成23年7月11日～7月25日</p> <p><input type="checkbox"/> 調査機関 宮崎県教育研修センター</p> <p><input type="checkbox"/> 調査内容 特色ある学習や行事、地域人材を生かした学習、小中連携など</p> <p><input type="checkbox"/> 回答方法 メール及びFAX</p>		<p>1 「貴校ならではの」学習や行事等について、それぞれ1つずつ記入下さい。</p> <p>① 特色ある学習(教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>特色ある学習(教科等及び概要)</th> <th>時数</th> <th>実施学年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>(例)・数学と英語に關する学力向上週間を、年間に8週間定め、朝または放課後の時間に、1週間に10分×5コマのモジュールを生かした取組を行っている。</td> <td>8</td> <td>中学校5学年</td> </tr> <tr> <td>・総合的な学習の時間で、米作りを田おこしから稲刈りまで行っている。</td> <td>50</td> <td>小学校5年</td> </tr> </tbody> </table> <p>② 特色ある行事(学校行事・学校の行事)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>特色ある行事(行事の種類等及び概要)</th> <th>時数</th> <th>実施学年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>(例)・遠征(学校行事)で河川敷に行き、班ごとに食材を持ち寄り、昼食作りをしている。</td> <td>5</td> <td>中学校5学年</td> </tr> </tbody> </table>		特色ある学習(教科等及び概要)	時数	実施学年	(例)・数学と英語に關する学力向上週間を、年間に8週間定め、朝または放課後の時間に、1週間に10分×5コマのモジュールを生かした取組を行っている。	8	中学校5学年	・総合的な学習の時間で、米作りを田おこしから稲刈りまで行っている。	50	小学校5年	特色ある行事(行事の種類等及び概要)	時数	実施学年	(例)・遠征(学校行事)で河川敷に行き、班ごとに食材を持ち寄り、昼食作りをしている。	5	中学校5学年
特色ある学習(教科等及び概要)	時数	実施学年																
(例)・数学と英語に關する学力向上週間を、年間に8週間定め、朝または放課後の時間に、1週間に10分×5コマのモジュールを生かした取組を行っている。	8	中学校5学年																
・総合的な学習の時間で、米作りを田おこしから稲刈りまで行っている。	50	小学校5年																
特色ある行事(行事の種類等及び概要)	時数	実施学年																
(例)・遠征(学校行事)で河川敷に行き、班ごとに食材を持ち寄り、昼食作りをしている。	5	中学校5学年																

【資料5 本調査の概要と調査資料の一部】

回収率は、小学校、中学校を合わせて、約94%であった。


(2) 「教育課程サポートブック」の作成

ア 作成に当たっての基本的な考え方

本調査を基に作成した「教育課程サポートブック」を、各学校の教育目標の実現に向けて、児童生徒や学校の実態を踏まえ、教育課程の編成において活用してもらうことにより、特色ある学校づくりに寄与し、宮崎県全体の教育力向上を目指す。

イ 作成の視点

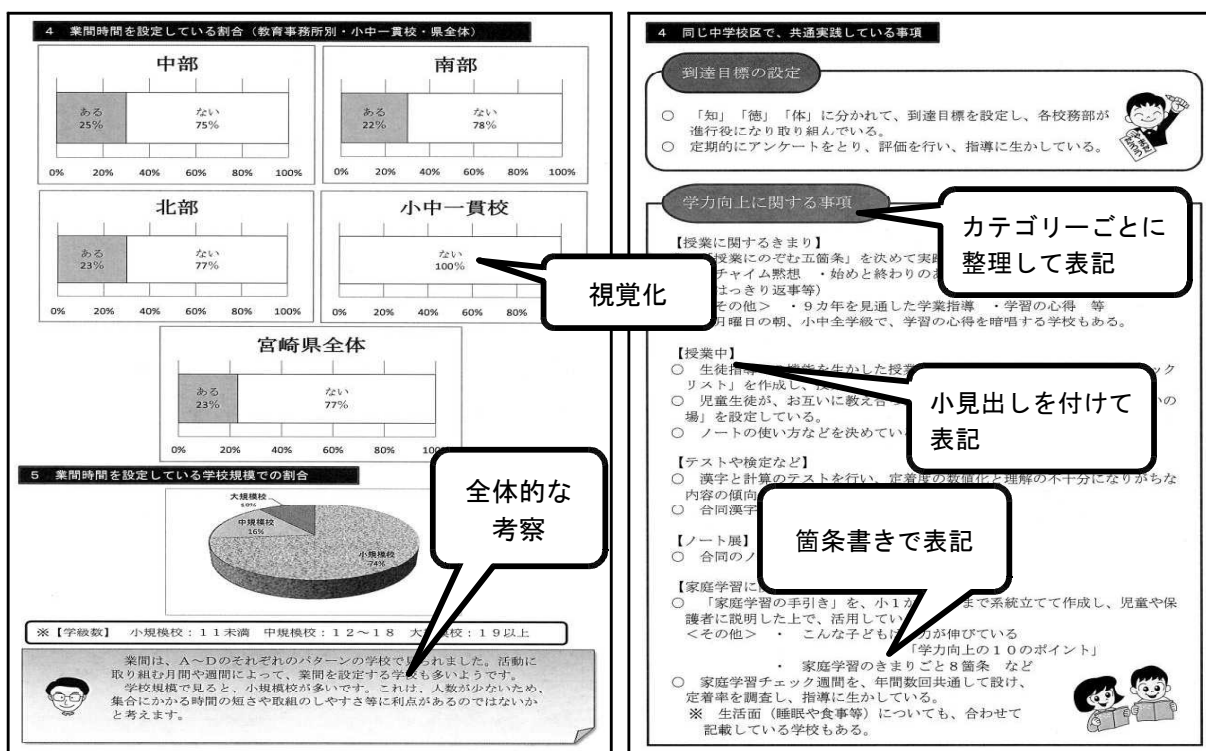
「教育課程サポートブック」を、教育課程の編成に関わるワークショップ型研修会で活用しやすいように、【資料6】の視点で作成した。

	<ul style="list-style-type: none"> ■ 掲載する内容は、事前調査の結果、知りたいと回答した割合が70%以上ものとする。 ■ 小学校、中学校分冊にする。 ■ カテゴリーごとにまとめる。 ■ パターン化できるものはパターン化する。 ■ 類似している教育活動は、まとめて分類する。 ■ グラフで示した統計は、全体的な考察を入れる。 ■ 特色ある学習や行事等の文章で記載した教育活動については、各学習や活動を、各学校の教育目標の実現を目指す上で必要なものを取り入れ実践してもらうために、考察は入れず、ほぼ原文のまま表記する。
---	--

【資料6 「教育課程サポートブック」作成の視点】

ウ 具体例

【資料7】【資料8】は、作成の視点を基に作成した「教育課程サポートブック」の一部である。



【資料7 業間時間を設定している割合】

【資料8 小中連携で共通実践している事項】

エ 活用方法

平成24年4月以降、宮崎県教育研修センターのトップページにある「研修・講座」のサイト「研修成果物」から、ダウンロードして活用できる環境を整える予定である。

URL : <http://mkkc.miyazaki-c.ed.jp/index.htm>

3 研究内容Ⅱ

(1) 「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修の工夫

これまでの教育課程の編成に関する職員会議は、すべての教師が同じ課題意識で、それぞれの課題を積極的に解決していこうとする意識は低かったのではないかと考える。それは、教育課程編成委員会等で十分検討された上で職員会議に出されるため、提案された時点で、これよりよい改善策はないだろうと判断する意識が強いと考えられるためである。時間的制約を考慮するとよい方法であるが、全教師の参画を促すという意味では、改善の余地があると考えられる。

そこで、本研究では、教師の教育課程の編成への参画意識を高め、意欲的に協働することができるようになるため、ワークショップ型研修を取り入れた教育課程の編成の在り方を考えていく。ワークショップ型研修を行う意義として、次のような利点が考えられる。

- 自分や自分たちの、課題解決を可能にする力を改めて自覚する。
- 知恵やアイデアを出し合い、つなげ合うことで、課題解決の糸口を探ることができる。

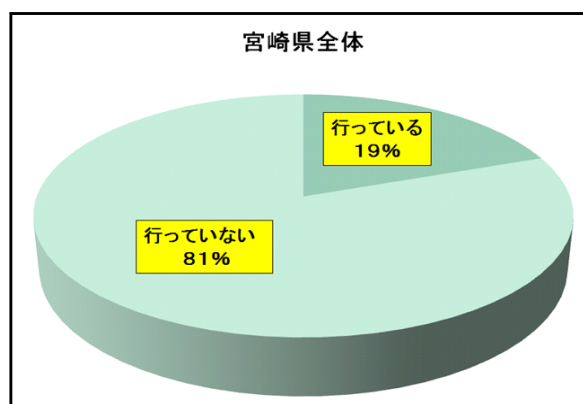
ワークショップ型研修は、【資料9】のような様々な手法がある。

手 法	特 徴
K J 法	テーマに関連するアイデアを思いつくままに出し、先入観にとらわれることなく整理したり、相互に関連付けたりする。その後、討議することで、新たな気付きを発見したり、課題解決の糸口を見いだしたりする。
ランキング法 ～ダイヤモンドランキング～	テーマに関連する9つの事柄をカードに記入し、重要度や必要度に応じてランキングし、ダイヤモンド型に配置することで、自分やメンバーの価値選択の特徴に気付く。
ブレインストーミング	テーマに関連するアイデアを4つのルール（自由奔放、批判は厳禁、質より量、便乗発展可）で自由に討議する。メンバーのアイデアのよさに気付く。
フィッシュボーン	課題の結果（特性）がどのような原因（要因）で起こっているかについて、因果関係を図にして表すことができる。また、出来上がった図（視覚化）を客観的に分析したり、多様なものの見方に気付いたりすることができる。
概念化シート	現状の分析や実態把握、課題を分析的に整理するなど、体験からの気付きを、縦軸と横軸で4象限に区切り、それぞれの要因が、4象限のどの辺りに位置付くかを確認する。

【資料9 主なワークショップ型研修の手法（一部）】

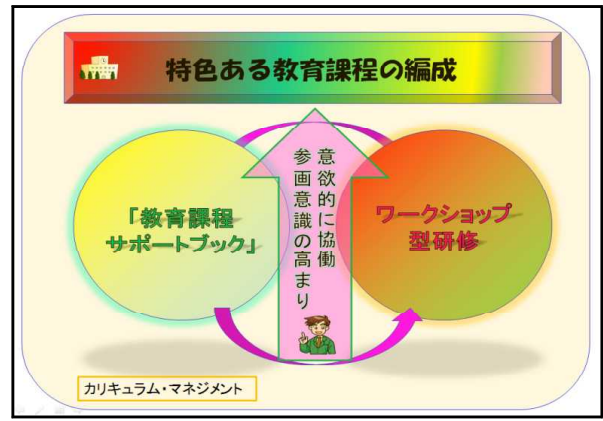
右の【資料10】は、本調査で行った、各学校が教育課程を編成する際に、ワークショップ型研修等を行っているか、いないかの割合を示している。これを見ると、行っている割合が2割に満たないことが分かる。

その理由として、教務主任に頼りがちな教育課程の編成であったり、教育課程の編成の在り方が定型化したりしていること、また、学校の教育目標の実現に向けて、教育課程を編成・実施・評価し、改善を図っていくというカリキュラム・マネジメントの考え方が、全教師に十分認識されていないことなどが考えられる。



【資料10 教育課程を編成する際にワークショップ型研修等を行っている割合】

そこで、教育課程の編成を行う一部において、ワークショップ型研修を取り入れることで、従来、教師の意識に偏りがあったと考えられる教育課程の編成を、全教師一丸となった編成にできると考えた。さらに、その研修時に、「教育課程サポートブック」を活用することで、【資料11】のような相乗効果が生まれ、教師の参画意識が高まり意欲的に協働して、特色ある教育課程の編成に取り組むことができると考える。



【資料11 ワークショップ型研修による効果】

ア 検証研修会①の実際（宮崎市立佐土原小学校 学級数15 職員数21 8月8日実施）

(7) 研修会の目標

次年度の週時程、校時程を考えることができる。

(イ) 研修会における仮説

「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修を行えば、教師は参画意識が高まり意欲的に協働して、次年度の週時程、校時程を考えることができるであろう。

(ウ) 研修会の流れ

時間	研修会の流れ	留意点	準備
10	1 研修会の目的について <ul style="list-style-type: none"> ・ カリキュラム・マネジメントについて ・ ワークショップ型研修について 	○ 本来は、学校長の学校経営ビジョンを受け、課題を明確にして行うべき研修会であることを補足説明する。	□パーポイント
	2 ワークショップ型研修会を行う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 「教育課程サポートブック」を参考にして、『次年度の週時程、校時程』を、<u>ワークショップ型研修</u>で考えよう。 </div>	○ 「現在感じている課題」「今後取り入れたい活動」の両面から考える。	
15	① 「教育課程サポートブック」を見る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0; display: inline-block;"> 情報を得る 活用する </div>	○ 週時程、校時程の課題や、児童の実態、地域の実態から見える課題など、多方面から考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0; display: inline-block;"> 拡散思考 </div>	□付箋
20	② 学年部に分かれて、ブレインライティングを行う。	○ ブレインライティングシートを3分ごとに回していく。	□ブレインライティングシート
25	③ カテゴリーごとに分け、改善策を検討する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 朝の時間 ・ 業間 ・ 午後の時間 ・ 放課後の確保 ・ 個別指導 など <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0; display: inline-block;"> 収束思考 </div>	○ 週時程、校時程を変えることで、課題が改善できることを優先順位を付けて考える。	
25	④ 振り返りを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 5分×3グループで発表する。 ・ 意識調査用紙に記入する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0; display: inline-block;"> 具体的な改善策 </div>	○ 各グループの発表後、質疑や応答の時間を設ける。	□意識調査用紙

(I) 研修会の実際

a 視点1：「教育課程サポートブック」を活用する

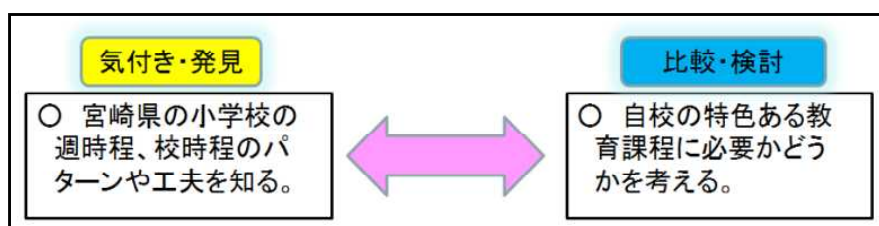
週時程、校時程を検討する時、教師は、現在の学校のものと、今まで勤務した学校のもの
とを比較し考えることが多い。そこで、県内の他校の取組がまとめた「教育課程サポ
ートブック」を参考にして考えることにより、情報量が増え、思考が広がり、自校の児童の実
態に合ったより特色ある週時程、校時程の編成ができるようになる。

実際、「教育課程サポートブック」により、全教師が、県内の小学校の週時程、校時程は、5
つのパターンに分けられることを初めて知ったようであった。また、他校の朝の時間や業間時間
などの取組の工夫が参考になったようである。【資料12】の教師の意識調査によると、今まで
の教師の意識を変え、改善を行う余地があることに気付き、更に工夫していこうとする教師
の教育課程の編成への参画意識を高めることができたと思う。

- ・ 他校の校時程を知り得る機会が少なく参考になった。
- ・ 他校の様子がよく分かり、我が校の校時程のよい点や工夫が必要な点が分かった。
- ・ 佐小の教育課程はベストだと思っていたので、あらたに改善の方法を加え、よりよい
ものにしようとするきっかけになったと思う。

【資料12 教師の意識調査結果の一例】

教師の意識を分析すると、【資料13】のように、「教育課程サポートブック」により、教
師に多くの「気付き」「発見」という意識が働き、その上で、自校に取り入れたい学習や活
動などが、自校の特色ある教育課程に必要なかどうかを「比較」「検討」することで、工夫・
改善すべき点を明らかにできたと考える。また、新たな「気付き」「発見」が多いほど、「比
較」「検討」する対象が多くなり、特色ある教育課程の編成が確かなものとなっていくと考
える。したがって、「教育課程サポートブック」は、自校の教育課程を客観的に把握するこ
とができ、より特色ある教育課程の編成へ取り組む意欲を高める一助になったと考える。



【資料13 教師の意識の分析】

b 視点2：ワークショップ型研修で考える

3つの学年部に分かれた後、拡散思考を促すため、ブレインライティングを行った。【資料14】
がその時の様子である。この手法のよさは、他の教師の考えを参考にしながら、更に自分の考えを
広げたり深めたりすることができる場所にある。

週時程、校時程は、その学校の在職期間が長いほど慣れてしまい、改善策が思い付かないことも
ある。そこで、「教育課程サポートブック」を活



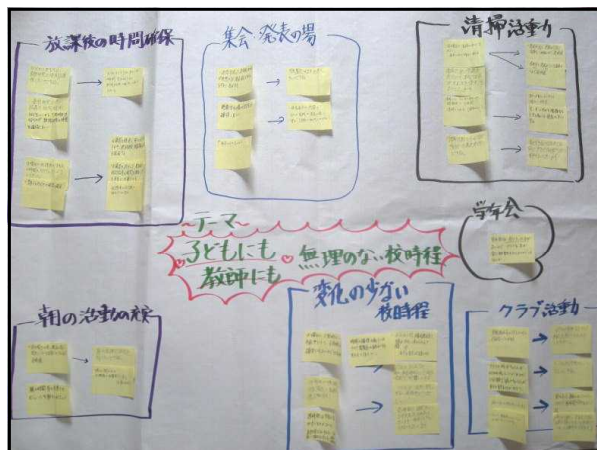
【資料14 ブレインライティングの様子】

用しながら、本手法を取り入れることにより、更に拡散思考を図ることにした。今までに、ブレインライティングを行った教師はいなかった。初めは戸惑ったり、3分ごとに隣に回していくことに、「もう3分？早い！」という声が多く聞かれたりした。次第に慣れていき、他の教師の考えを参考にすることで、「なるほど、こういう方法もあるね。」「確かに朝の取組は大事だけど、それに年間計画を作れば」など、より思考を広げ考える発言や記述が多く見られた。その後、収束思考を促すため、KJ法によるカテゴリーごとに分ける分類を行った。【資料15】

カテゴリーごとに分けることにより、現在の週時程、校時程の課題がどこにあるのかが明確になった。さらに、どのように改善すればよいか、次年度の改善策をグループで協議することができた。

その後、振り返りの場面では、各学年部の代表者が約3分ずつ発表を行った。それぞれの改善策を興味深く聞いたり、質問をしたりすることができた。それは、受け身ではなく、自分たちで考え発言し、まとめたという意識が高かったからだと考える。

3つのグループからは、主に下記のような意見が出された。【資料16】



【資料15 カテゴリーごよによる分類】

- ・ 朝の時間→短い時間で充実した取組の実施。
- ・ 休み時間→業間を、時期の指導（持久走、なわとびなど）に応じて設ける。
- ・ 給食の時間→バイキング給食。異学年交流。弁当の日。フッ素洗口。
- ・ 清掃時間→簡単清掃、充実清掃の導入。 など
- ・ 放課後の時間の確保→モジュールの導入。会議の精選。簡単清掃活動を火、金に。学年会や教材研究の時間の確保。

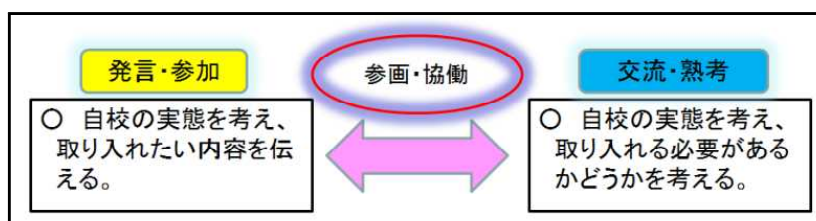
【資料16 KJ法により分類した主な事柄】

3つのグループで共通して多く出されていたのが、朝の時間の内容や放課後の時間の確保であった。これは、週時程、校時程が、児童の学習や生活のリズムの形成、教師の放課後の時間の運用、すなわち、児童と教師の1日のリズムに大きく関わることを改めて実感できたものと考えられる。

その改善策としては、朝の時間の内容については、年間を見通した計画を立てる。放課後の時間の確保としては、会議の精選を図ったり、清掃をカットしたりして、学年会や教材研究の時間を確保するなどの意見が出されていた。学校の教育目標の実現を図るために、児童及び教師にとって、よりよい週時程、校時程になるように工夫・改善していかなくてはならない。

今回は、収束法としてKJ法を行ったが、どの項目を優先的に改善していかなくてはならないのかを把握するためにも、概念化シートを用いるなど工夫をしていく必要があると考えた。

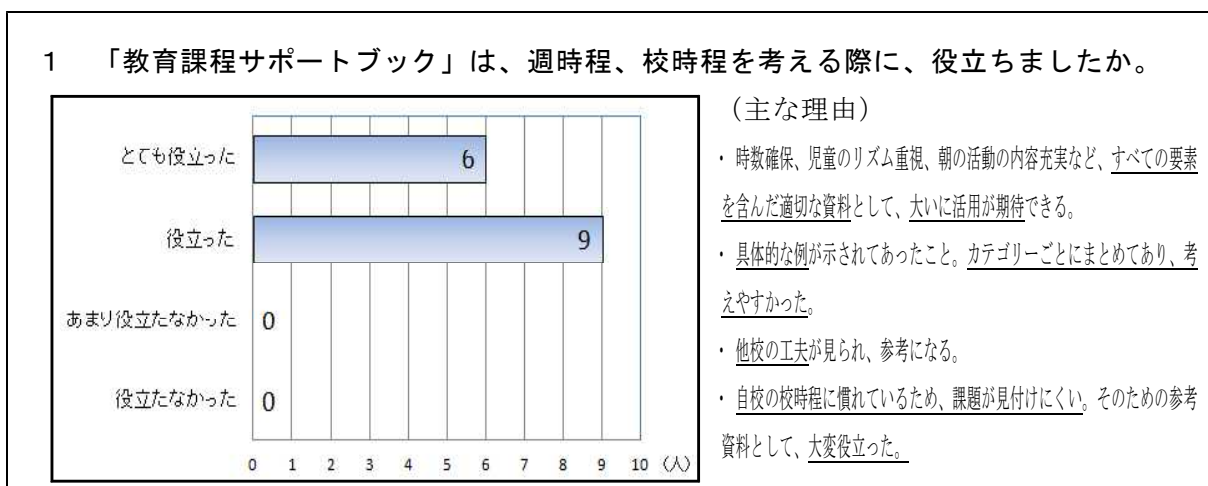
本研修において、ワークショップ型研修を取り入れたことにより、【資料17】のように受け身の参加ではなく、自ら発言し話合いに主体的に参加し、教師同士で意見を活発に交流し、熟考することができた。これにより、具体的な方策が明らかになるとともに、コミュニケーションが多く図られることで、教師は、教育課程の編成への参画意識を高め、意欲的に協働して取り組んでいこうとする意識を高めることができたと思われる。



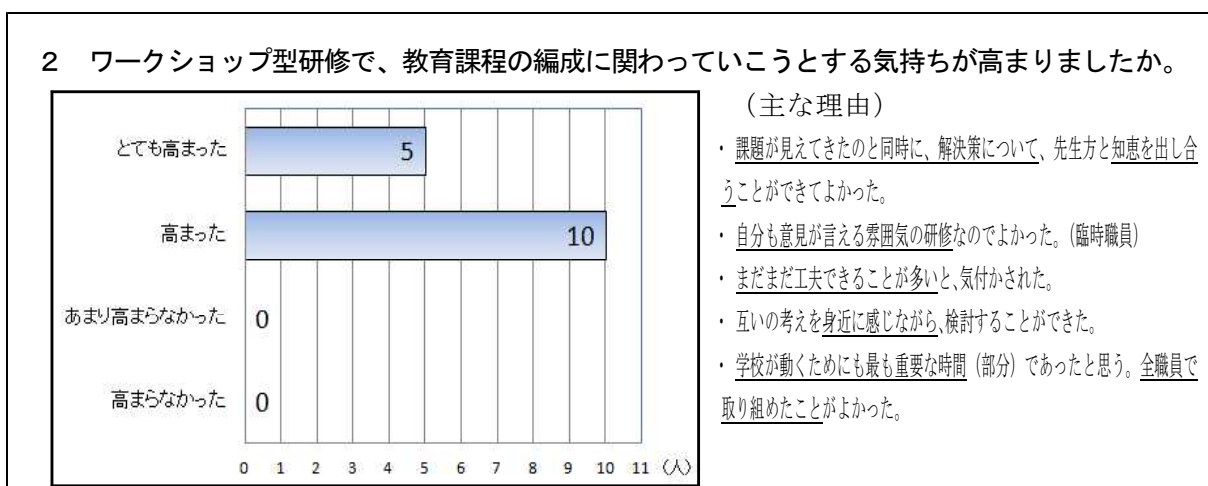
【資料17 教師の意識の分析】

(オ) 検証結果（教師の研修会後の意識調査結果：対象者数15名）

【資料18】【資料19】は、教師の研修会後の意識調査結果を表したものである。



【資料18 「教育課程サポートブック」に関する意識調査結果】



【資料19 ワークショップ型研修に関する意識調査結果】

○ 考察

- ・ 週時程、校時程を考える際に、「教育課程サポートブック」を使って、新たなアイデアを見だし、付箋に書き出している教師が多く見られた。資料も何もないところから考え出すのではなく、宮崎県の傾向という新たな資料を用いることは、新たなアイデアを生み出す上で意義があったと考える。
- ・ 週時程、校時程の課題や新たに取り入れたい活動は、その学校の経験が長くなるほど慣れ

てきて、それをよしとし、新たな改善の方向が見い出せない傾向がある。そこで、ブレインライティングの手法を使ったことにより、多くのアイデアを引き出すことができた。

- ・ 「教育課程サポートブック」とワークショップ型研修が有機的に関連し合い、教師の教育課程の編成に意欲的に関わっていかうとする意識を高めることができた。

イ 検証研修会②の実際（宮崎市立佐土原小学校 学級数15 職員数21 8月26日実施）

(7) 研修会の目標

次年度に取り組みたい、特色ある学習や行事について考えることができる。

(イ) 研修会における仮説

「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修を行えば、教師は参画意識が高まり意欲的に協働し、次年度に取り組みたい特色ある学習や行事について考えることができるであろう。

(ウ) 研修会の流れ

時間	研修会の流れ	留意点	準備
5	<p>1 研修会の目的について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ カリキュラム・マネジメントについて ・ ワorkshop型研修について <p>2 ワorkshop型研修会を行う。</p> <p>「教育課程サポートブック」を参考にして、次年度に取り組みたい『特色ある学習や行事』を、<u>ワークショップ型研修</u>で考えよう。</p>	<p>○ 今回のワークショップ型研修（概念化シート）について説明する。</p> <p>○ まず、担当学年の授業、次に、校務分掌の担当に関わるもの、それから他の取組について考える。</p>	□パワーポイント
15	<p>① 「教育課程サポートブック」を見ながら、取り組みたい学習や行事について考える。</p> <p>情報を得る 活用する</p>	<p>○ 自校で取り組みたい学習や行事を、担当の視点から児童や学校の実態を考慮し工夫して実施できることを考え、付箋に書き出す。</p>	□付箋
10	<p>② 近くの先生と意見を交流する。</p> <p>拡散思考</p>		
25	<p>③ グループごとに分かれ、付箋を概念化シートにまとめる。</p> <p>収束思考</p>	<p>○ 縦軸に「重要性」、横軸に「着手」の4象限に区切り、考える。</p>	□概念化シート □マジック
25	<p>④ 振り返りを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5分×3グループで発表する。 ・ 意識調査用紙に記入する。 <p>具体的な改善策</p>	<p>○ 各グループの発表後、質疑や応答の時間を設ける。</p>	□意識調査用紙

(I) 研修会の実際

a 視点1：「教育課程サポートブック」を活用する

検証研修会②では、学校の教育目標の実現を目指し、特色ある教育課程を編成するという参画意識を高めるために、まず、自分の担当の職務（自分の学年に関わる学習や活動、校務分掌、担当教科）において取り組む必要があることを考え、次に、他の取組を考えてもらうことにした。「教育課程サポートブック」を個人で見ている場面では、検証研修会①と同様に、教師に多くの「気付き」「発見」が見られた。【資料20】

- ・ 他校での取組を参考にして、自分の校務分掌での工夫すべきところを自覚できた。
- ・ 同じ行事でも、他校では様々な工夫や取組をしていることが分かり、勉強になった。

【資料20 教師の意識調査結果の一例】

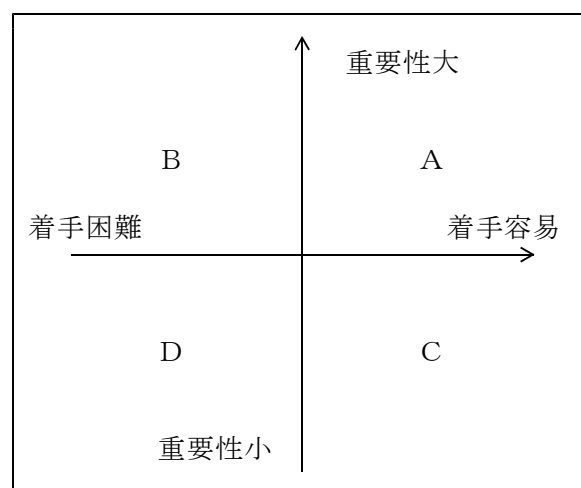
b 視点2：ワークショップ型研修で考える

今回は、検証研修会①で課題に上げた収束思考の改善として、概念化シートを用いることにした。理由は、優先的に実施すべき事項を視覚化した上で、協議できるからである。

【資料21】のような概念化シートを使用し、書いた付箋紙を貼っていくようにした。

A B C Dの枠内には、次のような事項の付箋紙が貼られることになる。

- A：組織にとって、最も適切な選択。
- B：長期的な計画として立案する必要がある。
- C：改善の取組のきっかけとして実行していくことができる。
- D：実行に移せる可能性が低い。改善策を考え再提案。



【資料21 概念化シートによる分類】

4象限に区切ることで、実施可能な学習や行事を見極めることができた。また、教師同士意見を交流する中で、実施に当たり工夫や改善が必要な事項等を明らかにすることができた。

グループ分けは、全教師を均等に3つのグループに分けた。その際、それぞれの学年や校務分掌に関わる内容を、普段話することが少ない教師と協議することで、色々な立場の意見を聞いて気付き、深めてもらうように配慮した。【資料22】



【資料22 概念化シートによる分類の様子】

付箋を貼る際に、ある教師は、自分の校務部の担当としての職務で、「教育課程サポートブック」に掲載していた他校の取組を自校でも実施したいと提案した。以下に、「地域安全マップづくり」に関する話合いの様子の一部を示す。【資料23】

【K：管理職 T：教師】

T 1：「教育課程サポートブック」にあるような地域安全マップをつくる必要があると思っているんですけど・・・。

T 2：それはいいですね。今の学校にはないですからね。これは、重要度は大で、着手は比較的容易になりますよね。

T 1：そうですね。

K 1：これは、前々から、作ってほしいと思っていました。

T 3：交通立ち番に協力していただいている、地域の□□さんが立たれている場所も載せてみてはどうですか？

T 1：いいですね。全校朝会で□□さんを紹介するのもいいですね。

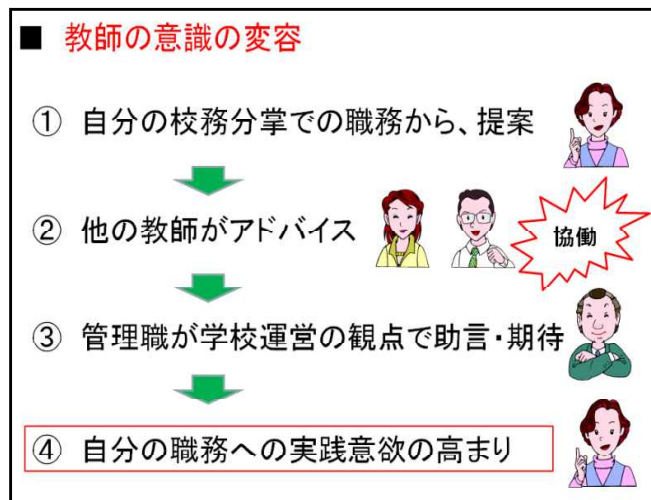
K 1：いい考えです。ぜひみんなで作りましょう。私も、□□さんや他の方にもお願いしておきます。楽しみにしています。

【資料23 話合いの様子（一部）】

この様子を【資料24】のように整理した。
ある教師が、校務分掌で担当している職務について提案し、更に他の教師がその実施に向けて自校の実態に合うようにアイデアを出し協議が進んでいった。それを聞いていた管理職が、称賛と励ましの言葉をかけた。

これにより、その教師は、自分の担当している職務に対し、工夫や改善すべき点を明らかにすることができたとともに、積極的に実施していこうとする意欲が高まり、他の教師もともに協力して作り上げていこうという協働する意欲が高まったと考える。

概念化シートによる3つのグループの分類は、大きく【資料25】のようになった。



【資料24 教師の意識の変容】

< A：重要性大・着手容易 >

- ・ 校内漢字、計算検定 ・ 地域安全マップづくり ・ 平和教育 ・ 弁当の日など

< B：重要性大・着手困難 >

- ・ 環境教育（追手川清掃） ・ キャリア教育（職場体験） ・ 小中一貫 など

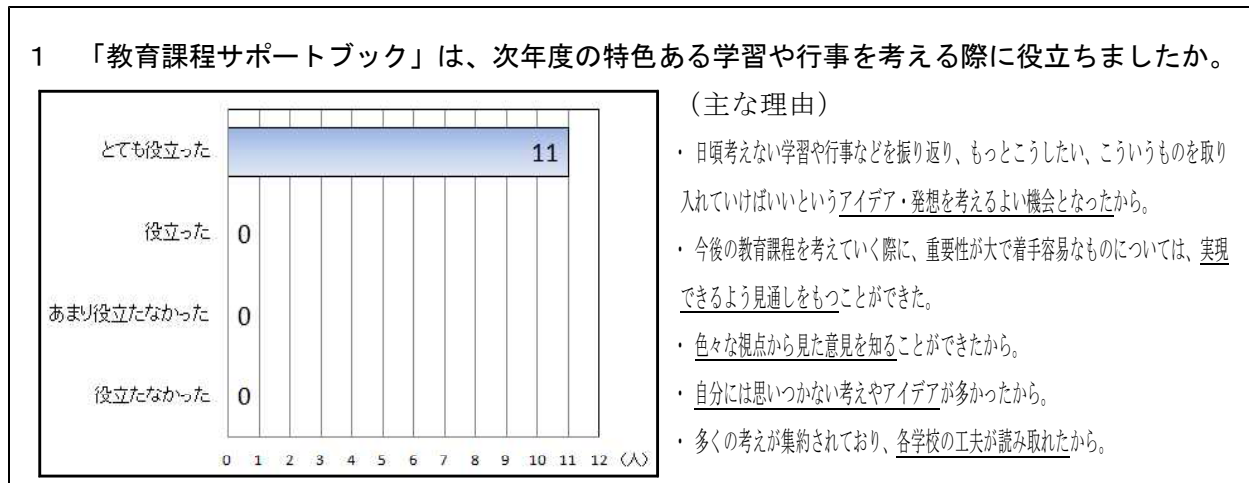
< C：重要性小・着手容易 >

- ・ 短歌、俳句づくり ・ 運動会での親子のふれあい ・ 福祉体験（施設訪問）など

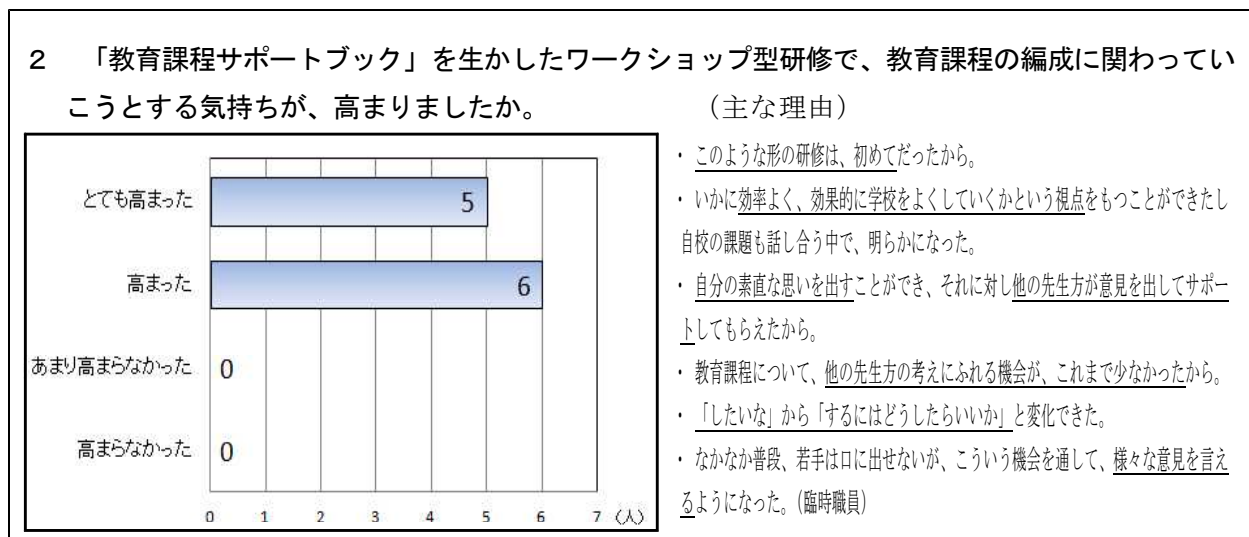
【資料25 概念化シートにより分類した主な事柄】

(オ) 検証結果（教師の研修会後の意識調査結果：対象者数11名）

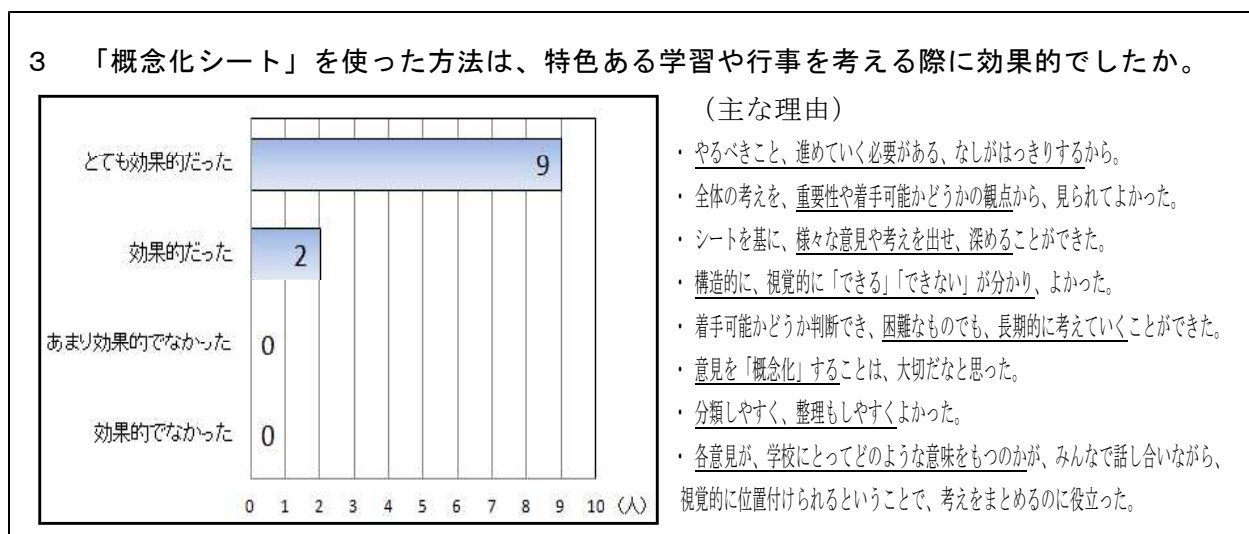
【資料26】から【資料29】は、教師の研修会後の意識調査結果を表したものである。



【資料26 「教育課程サポートブック」に関する意識調査結果】

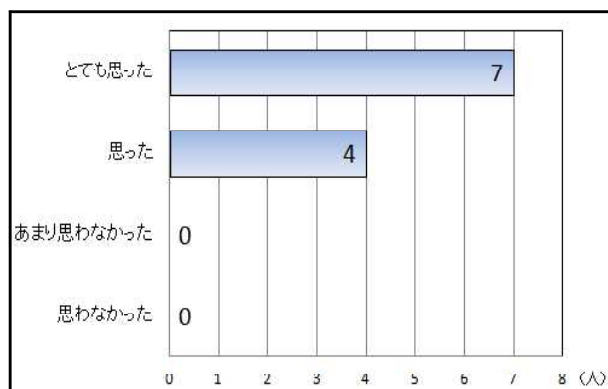


【資料27 教育課程の編成への意欲に関する意識調査結果】



【資料28 概念化シートに関する意識調査結果】

4 今回の研修を行ったことで、自分の日々の授業や校務分掌での役割を見直し、工夫・改善を図り、実践していこうと思いましたが。



(主な理由)

- ・ まだまだ、自校の教育課程に課題があるので、改善していきたい。
- ・ 自分たちのほんの少しの工夫で、学校が大きく変わるかもしれないと改めて感じた。
- ・ 話し合いを通して、また新たな気づきが多かったから。
- ・ 体力向上について、他校での取組があり、自分ももっと取り組もうと思ったから。
- ・ 自分が全体的な見通しの上で動いていないから、各部との関連も考えて動きたい。
- ・ すぐに取り入れていきたいものや、計画・打合せをして実践して進めていきたいものがあり、勉強になった。

【資料29 実践意欲に関する意識調査結果】

○ 考察

- ・ 教師の研修会後の意識調査結果によると、特色ある学習や行事を考える際に「教育課程サポートブック」を活用することで、「アイデア・発想を考えるよい機会となった」などの回答が見られた。検証研修会①と同様、資料も何もないところから考えるのではなく、宮崎県の傾向という新たな資料を用いることは、大変意義があると考えられる。
- ・ 概念化シートによる収束思考を取り入れたワークショップ型研修は、何を優先的に取り組んでいくことが望ましいかを見極めることができ、教師が協働して取り組む意欲を高める上で、有効であった。
- ・ 「教育課程サポートブック」を生かしたワークショップ型研修は、教師の教育課程の編成への参画意識や、自分の授業や校務分掌などの職務への実践意欲を高めることができた。

ウ 検証研修会①・②を通じた考察

「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修について

教師の意識調査によると、「教育課程サポートブック」は、全教師が「役立つ資料である」という肯定的な回答が得られた。また、「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修を行うことにより、【資料30】のような教師の意識の変化が見られた。

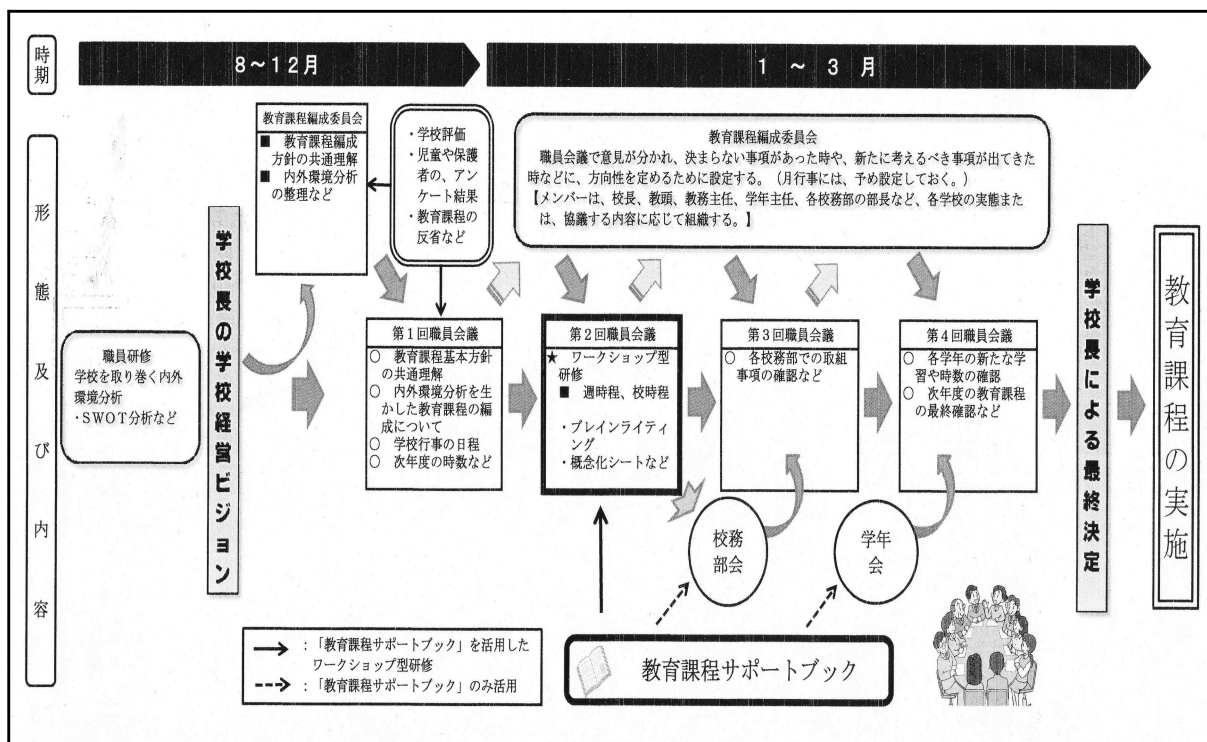
- ・ 今までの自分は、全体的な見通しの中で動いていなかったもので、これからは、各部との関連も考えて動きたい。
- ・ 自分たちのほんの少しの努力で、学校が大きく変わるかもしれないと改めて感じた。

【資料30 教師の意識調査結果の一例】

この結果より、「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修を行うことで、教師は、学校の教育目標の実現を目指し、参画意識が高まり、意欲的に協働して特色ある教育課程の編成に取り組むことができたのではないかと考える。これは本研究での「P計画」の充実に当たり、ひいては、特色ある教育課程の実施が期待できる。「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修は、特色ある教育課程の編成に有効な手段であると言える。

(2) 「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修を取り入れた教育課程の編成モデルの作成

2回の検証研修会の結果、「教育課程サポートブック」とワークショップ型研修の有効性が検証された。そこで、この2つを取り入れ、各学校が学校の教育目標の実現を目指し、特色ある教育課程の編成ができるように、次の【資料31】のような教育課程の編成モデルを作成した。



【資料31 教育課程の編成モデル】

この教育課程の編成モデルでは、校長の学校経営ビジョンを基に、職員研修と教育課程編成委員会、また4回の職員会議並びに校務部会、学年会を設定した。「教育課程サポートブック」を活用した教育課程の編成モデルのポイントは、次の2つである。

- ワークショップ型研修で、週時程、校時程の改善策を、全教師で検討する。
- 校務部会や学年会で、学校行事や学校の行事、各教科等の学習などを検討する。

教師の教育課程の編成への参画意識を高め、意欲的に協働して取り組むことができるようにするために、「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修は、教育課程の編成の早い段階で行う。内容は、次年度の週時程、校時程についてである。学校の週時程、校時程は、学校の教育目標の実現に大きくつながるものであり、児童生徒の1日の学習や生活のリズム、年間の授業時数、また教師の放課後の会議や教材研究等の時間の確保などに大きく関わる重要な協議事項であるからである。その際、出された事項に再度検討が必要なものがある場合には、教育課程編成委員会で再度協議して改善策を定め、次の職員会議で提案し決定するようにする。

次に、校務部会や学年会で「教育課程サポートブック」を活用する。学校の教育目標の実現のために次年度に行う必要のある学習や行事、その他の活動などを「教育課程サポートブック」を参考にして、教師間で意見交換を十分に行い検討することにより、各学校の特色ある学習や行事などを決定できるようにすることが大切である。その際、ワークショップ型研修での話し合いを短時

間で取り入れていくなどの工夫も考えられる。

教育課程の編成では、職員会議の回数や時間が限られている。ここでは、ワークショップ型研修を1回設定しているが、編成の計画や内容を工夫することで2回に増やして実施していくことも考えられる。

この教育課程の編成モデルは、各学校の実態に応じて、教育課程の編成を組織的、計画的、効率的に進められるようにするため、教育課程編成委員会や職員会議、またワークショップ型研修などを工夫して実施していくことが重要である。それぞれが、有機的に関連することにより、より特色のある教育課程の編成ができるものとする。

III 研究の成果と課題

1 成果

- 県内の小・中学校における教育課程の編成状況を、調査・集約した資料「教育課程サポートブック」を、分冊で作成することができた。
- 「教育課程サポートブック」は、教師が、教育課程の編成に関わる教育活動を考える上で、発想を広げる一助になるとともに、自分の担当する職務を実践しようとする意欲や協働して教育課程の編成に取り組む意欲を高めることができることが分かった。
- 「教育課程サポートブック」を活用したワークショップ型研修を行うことで、取り組みたい教育活動の意見交換が盛んになり、実施に向けての様々なアイデアが生まれ、教育課程の編成に、自分から関わっていこうとする意欲を高めることができることが分かった。
- 「教育課程サポートブック」とワークショップ型研修の有効性を、確かめることができた。

2 課題

- 教育課程の編成の話合いでふさわしいワークショップ型研修について、更に研究を深める必要がある。
- 次年度、検証研修会で出された意見を整理し編成された教育課程を、学校現場で実践・検証していくとともに、教育課程編成モデルの実践・改善を行い、カリキュラム・マネジメントのよりよい在り方を研究していく必要がある

《参考文献・参考資料》

- | | | |
|--------------------------|---------------------------------|---|
| 文部科学省(2008.8) | 小学校学習指導要領解説 総則編 | 東洋館出版社 |
| 独立行政法人 教員研修センター(2008.12) | 平成20年度 カリキュラム・マネジメント
指導者養成研修 | |
| 田村知子(2011.7) | 実践・カリキュラムマネジメント | ぎょうせい |
| 村川雅弘(2010.5) | 「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる学校を変える | 教育開発研究所 |
| 村川雅弘(2011.8) | ワークショップ型研修の進め方 | http://www.crdc.gifu-u.ac.jp/cerd/scs/resume2k7/scs20070608murakawa1.pdf |
| 八巻寛治(2009.10) | 忙しい先生のためのミニワークショップ12月 | 学事出版 |
| 安彦忠彦(2008.4) | カリキュラム開発で進める学校改革 | 明治図書 |
| 安彦忠彦(2008.9) | 小学校・学校力がUPする新教育課程マネジメント | 明治図書 |
| 工藤文三(2007.7) | 教育改革対応 小学校教育課程のマネジメント解説 | 明治図書 |